姫路科学館での自然史資料、特に小林平一コレクションの活用について

姫路科学館　学芸・普及担当係長　徳 重 哲 哉

1．姫路科学館について

姫路科学館は 1993 年 4 月 29 日に開館した総合科学館で、2018 年に開館 25 周年を迎える。2009 年に常設展示、2013 年にプラネタリウムをそれぞれ更新したのに続き、2015 － 16 年に建物大規模改修を行い、機能強化を図ってきた。

常設展示更新では「科学好きのみんなを育てる」科学館をスローガンに、「他ではできない体験ができる」科学館を追求した。人・もの・体験との出会いによって、みんなが発見・感動を得られる場所でありたいと考え、科学館にしかない展示で、驚きや感動、科学にわくわくし、印象に残る体験をしてほしいとの思いで展示を構成した。自然史分野では、資料を通じた本物体験のためにコレクションコーナーを設け、特に生物標本を順次入れ替えて展示している。

2　姫路科学館の自然史資料について

姫路科学館の自然史資料は、動植物、きのこ、クモの網、化石、岩石・鉱物、などを含む。このうち動物標本の中核をなすのが、小林平一コレクション（小林コレクション）である。

1）小林コレクション概要

小林平一氏（1923-2002）は、日本の古瓦の研究・復元に取り組み、姫路城をはじめ、数多くの文化財の瓦、特に鬼瓦の修復に携わった。平成 9 年には選定保存技術保持者・屋根瓦製作（鬼師）に選定されている。小林氏は家業の傍ら世界を周遊し、精力的に民俗資料や自然史資料を収集していたが、これは、「世界各地で現地の人が文物の価値を知らず大切にしないことを見過ごすことができず、収集を始めた」からだという。海外で収集した民俗資料には、小林氏の没後、遺族により現地に返還されたものもある（葉澤山、「交流」、2013.9、No.870、日本台湾交流協会）。

当館開館以来、小林コレクションの自然史資料の一部は、姫路市の鳥「シラサギ」類や市蝶「ジャコウアゲハ」類、クワガタムシ科などを、当館の資料充実のため順次購入してきたが、小林氏の没後は、貴重なコレクションの散逸を避けるため、2005 年度に姫路市が自然史コレクションを一括購入し、当館で保管することになった。収蔵スペースの不足から、購入当初は城郭研究センターの収蔵室に仮保管していたが、2008 年に資料収蔵棟を新設し、よう

やく館内で保管できるようになった。

当館で収蔵する小林コレクションは、鳥類、昆虫類、その他に大別される。鳥類は、主に1950年代から70年代にかけて採集され、本剥製、仮剥製合わせて約7,800点を数える。採集地が特定可能なものは、日本、韓国、台湾で大半を占める。昆虫類は標本箱に収納されているものだけで約4万点に及ぶ。未展翅のチョウ類標本も多くあり、総数は未確定である。チョウ類や甲虫類が充実しているが、哺乳類を中心とした剥製標本や化石等の資料もある。

2）小林コレクション整理事業

小林コレクションは、寄贈ではなく姫路市が購入したため、市および市議会から、公開を強く要請されている。小林コレクションの整理と公開は姫路市の主要事業の一つに位置付けられ、計画的に整理事業を進めている。

【鳥類コレクション】

鳥類コレクションは、鳥類（特にワシ・タカ類）の保護活動に取り組んできた市職員1名を再任用で配置し整理を進めた（現在は任期終了により退職）。2010年に目録を発行し、整理は一段落している。本剥製と仮剥製それぞれに収蔵室を1つずつ割り当てている。

【昆虫コレクション】

当館の自然史資料は、開館以来、指導主事（理科系教員）が管理してきたが、小林コレクション収蔵後は、生物系が不在となった。学芸員有資格者は天文担当3人のみで、常設展示リニューアルも控え、膨大な自然史標本の整理（同定からデータベース化までを含む）には手をつけられなかった。その後、常設展示更新の際に、展示業者の自然史フロア担当者がコレクションの全貌をみて、早急に整理する必要ありと受け止め、関西圏の昆虫を扱う博物館等の専門家たちとの仲介に当たってくれた。外部からの助言に基づき、保全と活用のためにはアウトソーシングもやむなしと結論し、整理事業は外部委託に踏み切った。

整理事業は2011年度から9か年計画とし、2010年に水族館から異動してきた学芸員（古生物・藻類）を主担当として進めている。事業開始当初は指名競争入札により委託先を決定したが、2年目以降は指名業者の辞退が続き、現在では入札になじまないとして、一者随意契約としている。これまでに、トリバネアゲハ類、タテハチョウ科、クワガタムシ科の整理が完了した。委託により毎年作成するデータベースは、目録発行及び国立科学博物館が取りまとめをしているS-Net/GBIFへの登録の2つの方法で公開している。

【動物コレクション】

動物は、名札のついたトロフィー等55点の他に未整理の標本があるが、目録出版には至っていない。

3　自然史コレクションの活用事例

小林コレクションは公開を強く要請されているが、自然史資料、特に生物標本は種によっては展示により劣化するものもあり、コレクション全体を常時展示することはできない。このため、コレクションコーナーで展示内容を定期的に入れ替えることにした。

1）常設展示・コレクションコーナー

【小林コレクション関係】

小林コレクションは、コレクションコーナーの目玉展示である。コレクションコーナーの壁面は、昆虫標本箱を入れ替えできるスペースと、鳥類剥製等を展示できるスペースを設けている。標本展示では生物多様性をキーワードとしていて、世界の動物地理区と多様性をクワガタムシ科の標本で紹介しているのがユニークである。また、鳥類（毎月更新）、昆虫類（年２回程度更新）など、分類群ごとにペースを変え、変化をもたせている。入れ替えごとに、バインダーに綴じた解説シートや小学生向けのワークシートを用意し、より深く標本を観察する手引きとしている。

写真１　姫路科学館常設展示室のコレクションコーナー

壁面は標本箱の入れ替え可能な棚、角は剥製展示スペース。左手前はミニ展示コーナーで、移動式展示什器の背面にも標本箱展示スペースがある。

【きのこコレクション】

小林コレクションとは別に、地元の研究家が採集したきのこ標本を収蔵している。持ち込まれた資料から、研究用としての温風乾燥標本と展示用の凍結乾燥標本を作製している。凍結乾燥標本は、透明樹脂塗布等の表面処理をした後、発生環境を模したミニジオラマを作成している。これは縦横を昆虫標本箱に合わせて製作した専用のアクリルケースに入れ、生態写真を添えて、昆虫標本箱と同様に壁面に展示している。入れ替えは季節ごとに行っている。

【ミニ展示】

小林コレクションのうち、整理が完了した分類群は、コレクションコーナーの一角でミニ

展示を行っている。移動式の展示什器を配置し、常設展示の入れ替え展示と同様に、解説パネルやワークシート類を用意している。ミニ展示は特別企画展示の前段階と位置づけ、ミニ展示をまとめれば大幅な追加なしに企画展示ができるよう、それぞれで取り上げるテーマやトピックに配慮している。なお、7月中旬からの約2ヶ月間は甲虫類の生体展示を行うため、小林コレクションのミニ展示は行っていない。

2）特別企画展示

小林コレクションは、整理に区切りがついたタイミングで特別企画展示を行っている。なお当館では、有料のものを特別展、無料のものを企画展としている。下記2回の「小林平一コレクション展」の他に、2010年に歯を通して動物の生態に迫る「カジル展」の一部に動物標本（剥製、頭骨）を展示したが、いずれの特別企画展でも、標本を見て「わぁ」と驚き、解説などにより「へぇ～」と思ってもらえるようにしている。

【特別展「第1回小林平一コレクション展　ワシ・タカの世界」】

2012年3月17日～5月6日に、小林コレクションの鳥類のうち、日本で見られるワシ・タカ類を展示した。展示点数は85種85点、観覧者数は6,855人であった。また、期間中に収蔵室ツアーを行い、58回で472人の参加があった。鳥類限定ではあるが、コレクションの迫力を実感できただろう。

標本展示にあわせて、姫路市内に生息するハヤブサの1年間の生態を記録した写真も展示した。これは鳥類整理に当たった職員が長年観察を続けている成果でもあり、コレクション展示にとどまらず、姫路市内のワシ・タカ類の現状について紹介する良い機会であった。

【企画展「トリバネアゲハから見える生物多様性　－第2回小林平一コレクション展－」】

2017年3月11日～4月9日に、小林コレクションの昆虫コレクションを特徴づけるトリバネアゲハ類（トリバネアゲハ属、アカエリトリバネアゲハ属、キシタアゲハ属）を展示した。8,000頭を超える標本から、34種、167亜種を選び、合計725頭を展示した。トリバネアゲハ類を種レベルでは100％、亜種レベルでは87％をカバーした。展示標本数はその他のアゲハチョウ類も含めて773頭、観覧者数7,330人であった。

展示期間中、ある観覧者から「南方に出征した父から聞いていた、夢のように美しい蝶の実物が見られて嬉しい」との声があった。また、小林氏のご遺族からは、「作業場の2階の部屋で父が標本に囲まれてご満悦だったのが理解できなかったが、このようにきれいに展示され、しっかりした解説がついて、ようやく父の気持ちがわかった」という感想をいただいた。

4　地域文化／地域振興への貢献

小林コレクションのうち、整理が完了し、移動に耐えるものは、館外での展示等にも活用している。特に、「シラサギ」やジャコウアゲハは、姫路市の鳥や蝶に指定された文化的背景の

紹介にも用いている。

1）郷土とのつながり

【昆虫標本】

姫路市内の小中学校対象の「移動科学館」事業で昆虫標本を活用している。昆虫標本を持参するのは小学３年の「チョウを育てよう」の単元だが、教科書的な内容だけでなく、市の蝶ジャコウアゲハの標本等も持参し、モンシロチョウがアブラナ科の作物を食害するのに対して、ジャコウアゲハはウマノスズクサ類のみを食草とするなどの生態の違いや、毒蝶であるジャコウアゲハに擬態する種を取り上げるなど、発展的な内容の題材としている。また、姫路城主だった池田家の紋が揚羽蝶紋であったこと、志賀直哉の「暗夜行路」に姫路の土産物としてジャコウアゲハの蛹「お菊虫」が登場することなど、姫路とのつながりも紹介している。

【鳥類標本】

2016 年に、市内の小学校の総合的学習のためにサギ類の標本を提供した。隣接する林にサギ類の大規模なコロニーができ、糞害などで悩まされている小学校で、サギ類を嫌悪するのではなく、市の鳥「シラサギ」について様々な視点から調べ、理解することで共生の道をさぐりたいという教員の希望によるものだった。姫路城が別名「白鷺城」と呼ばれていることにちなんで姫路市の鳥に「シラサギ」が指定されているが、当館標本を通して、シラサギという種はなく、全身が白い、ダイサギ、チュウサギ、コサギの３種の総称がシラサギであることなどを学んだ。

2）関係施設との連携／イベントへの協力

【姫路市自然観察の森との連携】

当館には現在、鳥類の専門家がいないが、近隣の姫路市自然観察の森に常駐する日本野鳥の会のレンジャーと連携して、毎月の展示替えを行っている。レンジャーの過去の観察記録に基づき、その月に桜山公園で見られる野鳥の一覧を掲示するとともに、代表的な野鳥を４、５種選び、小林コレクションの鳥類本剥製標本とレンジャーが作成した解説パネルを展示する。剥製標本を見て実物を見たくなった来館者には、自然観察の森での野鳥観察を勧めるなど、同じ地域の自然系施設として、相利共生を図っている。

【標本展示協力】

・姫路文学館リニューアル記念特別展への協力

2016 年にリニューアルした姫路文学館の、リニューアル記念特別展「上橋菜穂子と精霊の守り人」展関連イベント「世界に一羽・・・空想の鳥を描いてみよう！」に鳥類剥製標本を提供した。神話や物語に登場する鳳凰などの想像上の鳥がどのように想像・創造されてきたかを追体験するイベントだった。

・姫路「鷹匠文化」フォーラムへの協力

2018 年 1 月 13 日に開催される姫路「鷹匠文化」フォーラム（主催：姫路市市長公室企画政策推進室）に、剥製標本 7 種 10 羽の展示と解説パネル用資料提供で協力する。同フォーラムは、姫路城の西側に「鷹匠町」の地名が残るように、江戸時代に鷹匠・鷹狩の文化を有しながら、現在は十分に認知されていない姫路市と鷹の繋がりについて、フォーラムの開催等を通じて多面的に発信するものである。午前中に姫路城三の丸広場で鷹フライトショー（放鷹術の実演）が 2 回、午後には、姫路城西側にあり鷹匠町に隣接する姫路文学館講堂で、こども鷹匠ワークショップ、講演、パネルディスカッション、生体及び剥製標本の展示が予定されている。なお、鷹フライトショーは、姫路市立動物園の職員が半年かけて取り組んできた鷹匠技術習得の成果を披露する場でもある。

5　まとめ

姫路科学館は「科学の展示とプラネタリウム」の 2 本柱を持ち、姫路市の施設としては集客力の大きな施設だが、姫路城や中心市街地から離れているため、観光客が姫路城見学のついでに、市民が散歩や買い物がてらに立ち寄る施設ではない。来館者は当館を目当てにやってくるのだが、残念ながら、当館を知らない市民も少なからずいる。このため、様々な機会をとらえて、科学館の「人」・「もの」を館外に送り出し、多くの人に「体験」してもらうことも大切だと考えている。移動天文教室（小学校に出向いての天体観望会）や移動科学館のようなレギュラー事業だけでなく、大規模改修工事に伴う休館中には、市内の幼稚園・保育園等での「移動サイエンスショー」にも出向いてきたが、これからも、整理が進む小林コレクションをはじめとする自然史資料の活用を含め、科学と地域の歴史・文化が接する部分で、学校や市内の博物館だけでなく、教育委員会以外の市長部局とも連携し、本物に触れる機会を提供していきたい。